胞姫神社と源義経

　源義経が、京都から奥州に逃げていく途中、柏崎を通られました。

　上輪の「かめわり坂」という峠にさしかかったとき、義経の奥方が産気づかれました。家一軒もない峠でしたので、大きな木の下でお産をすることになりました。けれども、そこには生まれてくる赤ん坊を洗い清める水がありませんでした。それで、家来の弁慶が神さまにお祈りをして、「水のある場所をお教え下さい」と叫んで、持っていた杖を投げました。杖は上輪新田の方に飛んでいき、大きな岩につきあたりました。その大岩をころがすと、岩の下にはきれいな水がこんこんとわき出てきました。

　まもなく、無事男の赤ん坊が生まれ、長生きできるよう「かめつる」という名前がつけられました。かめつる様の誕生は、人目をさけて逃げ続けているみんなの暗い心を、明るくはれやかにしてくれました。そして、お祈りしたほこらのそばにかめつる様のえな（胞・・・胎児を包む膜や胎盤）をうめました。

　それ以来、この神社は胞姫神社と呼ばれ、安産の神様として広く知られるようになりました。

　また、弁慶が産湯を得るために杖で掘った井戸は、「弁慶の産水井戸」として知られています。